

氏名（本籍）	金澤 郁恵		
学位の種類	博士（リハビリテーション科学）		
学位記番号	博甲第	9893	号
学位授与年月	令和 3年 3月 25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	小児肝移植者の発達とライフステージに応じた支援に関する研究		
主査	筑波大学准教授	博士（心身障害学）	佐島 毅
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	川間 健之介
副査	筑波大学教授	博士（保健学）	山田 実
副査	和歌山大学教授	博士（学術）	武田 鉄郎

論文の内容の要旨

金澤郁恵氏の博士論文は、「小児肝移植者の発達とライフステージに応じた支援」について、小児肝移植者本人および保護者の観点から調査し、検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

本研究は小児肝移植者の乳幼児期から青年期までのライフステージに沿った研究デザインとし、6つの研究で構成され、小児肝移植者本人および保護者の観点から、各ライフステージにおける課題および支援ニーズを明らかにし、具体的な支援方法と長期的な視点での移行期医療の体制を提言することを目的としている。

（方法）

研究1で著者は、1歳未満で肝移植をした胆道閉鎖症児8名の術後1年間の身長・体重と、発達指数に基づいた発達経過を明らかにし、発達支援ニーズについて検討している。研究2から研究4は、小児肝移植者の保護者262名を対象に、移植に関する説明時期・内容、肝移植前後の支援ニーズ、移植後の保育園・幼稚園および小学校生活における必要な支援について質問紙調査を行っている。研究5では、中学生以上の肝移植者本人65名を対象に質問紙調査を行い、学校生活および社会人生活・肝移植者との交流と手術の傷あと・服薬アドヒアランスの観点から、青年期において本人が必要とする支援について検討している。研究6では、中高生の肝移植者本人42名と、成人の肝移植者本人23名を対象に、健康関連QOL調査を行い、青年期の小児肝移植者における健康関連QOLの特徴とそれに関連する因子を検討している。

（結果）

- 1歳未満で肝移植をした胆道閉鎖症児の発達指数は、退院時の姿勢運動領域が他の発達領域に比べて有意に低いですが、1年後は有意差がみられず標準範囲に近づくことを明らかにしている。一方で、全領域で標準値に達した症例はなく、少なくとも移植後1年間においては発達全般の遅れを伴うことが予測され、長期経過観察と発達支援の必要性を示唆している（研究1）。
- 移植についての本人への説明時期について、幼稚園の年齢から「話した」との回答が過半数を超え、ほとんどの患児で小学校高学年までには親から説明がなされていた。移植児本人の成長とともに医療者側からの説明のニーズを示唆している（研究2）。
- 移植前後に必要な支援や心配ごとの回答は、『医療的なこと』、『メンタルサポート』、『ライフステージ』、『社会の理解』、『発達関係』、『その他』の6つの概念に分類され、小児肝移植者の支援ニーズの枠組みとしてこのような観点をもつことが必要であると示唆している（研究3）。
- 保育園・幼稚園ともに入園拒否される状況があり、医療機関が肝移植後の配慮事項について、

保護者と園をつなぐ役割の必要性が示唆されている。小学校就学先と代謝性疾患との関連を明らかにし、特別支援教育のニーズが示されている。保護者・医療機関・学校の連携のもと、発達段階に応じた肝移植への理解や学習・行事などの具体的な場面での支援の必要性を示している（研究 4）。

5. 中学校以上の学校生活において、通院や入院による欠席の影響や学校とのコミュニケーション面での課題が示されている。中高生時代に多かった「傷あと」の悩みは性別に有意差はなく、傷あとへの配慮や治療の選択肢提示の必要性を示唆している。怠薬および拒薬（服薬アドヒアランスの低下）と肝機能悪化に関連性があることが明らかにされている。その関連要因として成人期の生活背景の変化、服薬管理の重要性の理解、医療費の負担感を示唆している（研究 5）。
6. 中学生・高校生の健康関連 QOL は「学校」尺度が他の下位尺度に比べて有意に低く、欠席に関する項目との有意な関連を明らかにしている。また、「薬の副作用の有無」は「感情の機能」と有意に関連し、心理的な負担軽減の必要性を示唆している。成人の健康関連 QOL は「日常役割機能（精神）」が他の下位尺度に比べて有意に低いことを明らかにしている。「薬の副作用の有無」は仕事や普段の活動における身体面との関連が明らかになり、中高生と同様に成人の支援ニーズにおいても重要な

視点であることを示唆している（研究 6）。

（考察）

本研究は、小児肝移植者本人および保護者から得られたデータを元にして各ライフステージ（乳幼児期、学童期、青年期）と移行期の観点から、課題および支援ニーズを明らかにし、具体的な支援者を含めた支援体制の指針を示したものである。さらに本研究では、乳児期の肝移植後 1 年間の詳細な発達過程、および青年期の小児肝移植者を対象とした健康関連 QOL の特徴とそれに関連する因子を量的に示した点が新知見である。また、本論文で示した発達段階に沿った肝移植の説明方法および、特別支援教育のニーズをはじめとした幼児期から青年期までの日常生活の実態が明らかとなり、小児肝移植者の情報共有の基礎資料になる点に臨床的な意義があるとしている。本論文で明らかになったライフステージごとの支援ニーズをふまえて、移行期支援体制とその支援の担い手の整備が重要であると結論している。

審査の結果の要旨

（批評）

金澤氏の研究は、小児肝移植者の乳児から成人に至るまでのデータを積みあげ、ライフステージごとのニーズおよび一貫した課題を示し、小児肝移植者の日常生活の実態に即した支援体制に関する新知見を示した点から高く評価できる。また、国内における青年期の小児肝移植者本人の健康関連 QOL および就学・就業の実態を明らかにした初めてのデータであり、それに基づいて、今後の量的な分析の道筋を示した。さらに、これから青年期を迎える小児肝移植者や将来の小児移植者および保護者に対して、将来の生活や学業における課題等への疑問解決や人生の見通しに資する知見を示すとともに、小児肝移植者に対する各ライフステージの支援ニーズと対応の指針を提言した点は臨床的・社会的意義が大きく、我が国における小児肝移植者に対する新たな支援の構築に寄与するものである。

令和 3 年 1 月 8 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（リハビリテーション科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。